

2021. 5. 23 (日) 使徒 1 : 3 ~ 8

1:3 イエスは苦しみを受けた後、数多くの確かな証拠をもって、ご自分が生きていることを使徒たちに示された。四十日にわたって彼らに現れ、神の国のことを語られた。

1:4 使徒たちと一緒にいるとき、イエスは彼らにこう命じられた。「エルサレムを離れないで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。

1:5 ヨハネは水でバプテスマを授けましたが、あなたがたは間もなく、聖霊によるバプテスマを授けられるからです。」

1:6 そこで使徒たちは、一緒に集まったとき、イエスに尋ねた。「主よ。イスラエルのために国を再興してくださるのは、この時なのですか。」

1:7 イエスは彼らに言われた。「いつとか、どんな時とかいうことは、あなたがたの知るころではありません。それは、父がご自分の権威をもって定めておられることです。

1:8 しかし、聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります。」

<説教>

本日は聖霊降臨節（ペンテコステ）です。

「ペンテコステ」とはギリシア語の「50」を意味する語に由来する言葉で、「五旬節」（使徒 2:1, 20:16、I コリント 16:8）と訳されています。

神がご自分の民イスラエルに、出エジプトを記念して行うようにお命じになったのが「過越の祭」で、さらにそれから 7 週後の 50 日目に行うようにお命じになった「七週（しちしゅう）の祭」の日が「五旬節の日」でした。

それは「刈り入れの祭り」（出エジプト 23:16）、「初穂の日」（民数記 28:26）ともいわれ、ユダヤ人にとってとても大切な日でした。

そしてその日はイエスが死人の中からよみがえられた日から 50 日目でもありました。

神はこの「五旬節」の日を、私たちの罪のために十字架で死なれ 3 日目によみがえられたイエスを「生ける神の御子、キリスト」「救い主」と信じる私たち、イエスの弟子たちにとっても大切な日とお定めになったのです。

今からおよそ 2000 年前のその「五旬節の日」にイエス・キリストの弟子たちがエルサレムの一つ所に集まっていたとき、その弟子たちに聖霊が特別に激しくお降りになりました。

そのときのことは「使徒の働き」の 2 章に記されています。

その弟子たちは数にして〈百二十人ほど〉(1:15)でしたが、聖霊降臨の結果、ペテロの説教を聞いて、〈彼のことばを受け入れた人々はバプテスマを受けた。その日、三千人ほどが仲間に加えられた〉(2:41)のです。

〈彼らはずっと、使徒たちの教えを守り、交わりを持ち、パンを裂き、祈りをしてい〉(2:42)ました。

このようにして、言わば目に見えるキリスト教会が正式に始まりました。

それでペンテコステはキリスト教会が誕生した記念の日だとも言われています。

さて、基本的なことですが、聖霊は神です。

使徒信条でも告白しているように、聖霊は、「天地の造り主、全能の父なる神」と「その独り子」「聖霊によりてやどり…かしこより来たりて生ける者と死にたる者とを審きたまわん」「我らの主イエス・キリスト」と並ぶ第三位格の神であります。

私たちが信じる唯一の神は、御父、御子、御霊（聖霊）なるお方であり、三人にして一人、一人にして三人であります。

このことを私たちの言葉で「三位一体」の神と言っているのです。

聖霊は御父と御子のみこころの通りに働かれ、御父と御子のみこころを実現するのです。

本日の聖書から言うなら、〈父の約束〉を御子イエスがお語りになり、その約束のみことば通りに聖霊が働いて弟子たちにお降りになって〈聖霊のバプテスマ〉をお授けになるのです(1:4,5)。

そもそも、聖霊が罪人である人間に働かれて初めて罪人の知性も意思も感情も生まれ変わるのです。

主イエス・キリストを知り、信じ、悔い改め、従うように新しく造り変えられるのです。

聖霊が私たちに働いてくださって初めて私たちのうちに主イエス・キリストを信じる信仰が生まれるのです。

〈神の御霊によって語る者はだれも「イエスは、のろわれよ」と言うことはなく、また、聖霊によるのでなければ、だれも「イエスは主です」と言うことはできません。〉(I コリント 12:3)

私たちは自分の力で努力してイエスを信じるのではありません。

私たち人間は皆、全く墮落し、腐敗しきっているからです。

自分の力（それが生まれつきの素質のようなものであれ、また生まれた後で努力して身につけたものであれ）でイエスを信じることができる人はこの世に一人もいません。

初めの天地創造のときに神のみことばの通りに世界に光といのちと秩序を生み出した聖霊が、全く墮落している私たち罪人のうちにイエスをわが主、救い主と信じる信仰を（そもそも信じたいという思い、願いも）起こしてくださるのです。

そして聖霊の働きはそれだけでは終わりません。

聖霊はイエスを信じた私たちが信じ続け、イエスにつき従い、イエスの〈証人〉となる〈力〉をも私たちにお与えになるとイエスは約束してくださいました。

その〈力〉は、弟子たちが「主よ。イスラエルのために国を再興してくださるのは、この時なのですか。」(1:6)と意気込んでイエスに尋ねたきにおそらく期待していたであろう「イエスの右または左に座って人々を支配する」ような力ではありません。

むしろ反対に「皆に仕える者」「皆のしもべ」としてイエスを証しする〈証人〉としての力と言っているでしょう。

1:8 しかし、聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります。」

〈臨む〉と訳されている言葉(ルカ 1:35 も)は、「襲う」(ルカ 11:22)、「起こる」(ルカ 21:26) — 一なお第三版では「襲う」 —、使徒 8:24、13:40)、「迫り来る」(ヤコブ 5:1)とも訳されているように、その人には抵抗も逆らうこともできないような大きな力が「来る」(使徒 14:19、

エペソ 2:7) という意味です。

〈力〉は「ドゥナミス」(ギリシャ語)の訳ですが、「ダイナミック」とか「ダイナマイト」といった英語の基となった言葉です。

これもやはり人の力を超えた力、病をいやし、悪霊を追い出し、死人をよみがえらせる「奇跡」の力、即ち神の全能の力を意味します。

つまりイエスは聖霊が弟子たちの上に迫り来る、彼らが逃げられないように襲うように来られる、彼らを丸ごと包み込み、満たし、浸してしまうー〈バプテスマ〉(1:5)の意味ーと言われたのです。

そうなれば弟子たちには人間の力に遙かに勝る神の力、不可能なことはない神の力、奇跡の力が与えられると言われたのです。

罪人が支配しているこの世に神の支配をもたらす神の全能の力を受けると言われたのです。

そんな神の〈力を受け〉る弟子たちがどんな者になるか、聖霊が弟子たちをどんな者にするかと言うと、「エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります」とイエスは言われました。

弟子たちはこのとき「エルサレム」にいました。

しかし今後はそこに留まらず、「地の果て」(地の最後、地の終末)までイエスの〈証人〉となるとイエスは言われました。

そう言われた時から五十数日前にイエスは弟子たちにご自分の再臨と世が終わるときがいつなのかはお教えにならず、その時は御父だけが知っておられると言われました。

またそこで「御国のこの福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての民族に証しされ、それから終わりが来ます。」(マタイ 24:14)とお教えになっていました。

つまりイエスの弟子たちは、イエスが再び来られるその時まで、イエスの故の大きな困難、迫害、苦しみの中で、それらにも勝る、またそれらからお守りになりお助けになる神の全能の力によってイエスを証しする〈証人〉となるとイエスは言われたのです。

それは〈人間の願いや努力によるのではなく、あわれんで〉(ローマ 9:16)聖霊を送り、聖霊で満たしてくださる御父と御子によることです。

御父と御子のみこころをその通りに完全に実現なさる聖霊の〈力〉によるのです。

ペテロを始めとした弟子たちは、ほんの 40 日ほど前までは、人を恐れ、自分の命惜しさにイエスを見捨てて逃げていた臆病者、卑怯者でした。

しかしイエスはそんな彼らを見捨てませんでした。

そんな彼らに御父とともに聖霊を送り、彼らを聖霊の特別な力によって生まれ変わらせ、命を賭けるイエスの〈証人〉とするみこころなのでした。

〈証人〉と訳されている言葉は後に英語では「殉教者」を意味する言葉の基になります。

イエスの約束通りに聖霊が彼らの上に臨まれた後、イエスのみことばの通りに彼らはイエスを大胆に証しするようになりました。

つい数ヶ月前にイエスを死刑に定めたユダヤ人の指導者たち、長老たち、律法学者たち、大祭司たちが集まった議会の真ん中に今度は自分が立たされたペテロは〈聖霊に満たされて、彼らに言〉(使徒 4:8)いました。

イエスについて、「あなたがたが十字架につけ、神が死者の中から中からよみがえら

せた」(4:10)と恐れることなく彼らの罪を鋭く指摘し、彼ら人間に勝る神の力を証しました。

そして『あなたがた家を建てる者たちに捨てられた石、それが要の石となった』というのは、この方のことです。この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人間に与えられていないからです。」(4:11,12)と続けてイエスを証しました。

今後イエスの名によって語ることも教えることも、いっさいしてはならないと彼らに脅され命じられたペテロとヨハネは「神に聞き従うよりも、あなたがたに聞き従うほうが、神の御前に正しいかどうか、判断してください。私たちは、自分たちが見たことや聞いたことを話さないわけにはいきません。」(4:19,20)とはっきりとイエスを証しました。

続く5章でも、ねたみに燃えた大祭司とその仲間たち、サドカイ人たちによって最高法院で「あの名によって教えるはならないと厳しく命じておいたではないか」と尋問されたときもペテロと使徒たちは殺されることを恐れることなく答えました。

「人に従うより、神に従うべきです。私たちの父祖の神は、あなたがたが木にかけて殺したイエスを、よみがえらせました。神は、イスラエルを悔い改めさせ、罪の赦しを与えるために、このイエスを導き手、また救い主として、ご自分の右に上げられました。私たちはこれらのことの証人です。神がご自分に従う者たちにお与えになった聖霊も証人です。」(5:29-32)

このように、イエスの故の迫害、困難、死の恐れに満たされ縛られていた弱い弟子たちを生まれ変わらせ、造り変え、恐れに打ち勝たせ、命を賭けて「死に至るまで忠実」にイエスを証しさせるのが聖霊の働きであり、力です。

「御霊はわたしの栄光を現されます。わたしのものを受けて、あなたがたに伝えてくださるのです。」(ヨハネ 16:14)とイエスは弟子たちに言われましたが、その通りになったのです。

「あなたがたは悪い者であっても、自分の子どもたちには良いものを与えることを知っています。それならなおのこと、天の父はご自分に求める者たちに聖霊を与えてくださいます。」(ルカ 11:13)とイエスは約束しておられます。

すでに聖霊の働きによってイエスを求め、イエスを信じて罪赦され、死んでも生きるイエスにある復活のいのちを与えられている私たちです。

私たちはその感謝と喜びをもってますます、日々聖霊を求め与えられ、聖霊の力でイエスの〈証人〉となり、遣わされているこの世で人を恐れずイエスに従い、イエスの栄光を現して生きる者なのです。

また、復活後にはガリラヤで弟子たちに言われました。

「わたしには天においても地においても、すべての権威が与えられています。ですから、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを授け、わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい。見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。」(マタイ 28:18-20)

イエスの弟子たちに聖霊が特別に注がれることは、イエスが地上におられたとき、十字

架につけられる直前に弟子たちに約束してくださっていたことでした。

「わたしが父にお願いすると、父はもう一人の助け主をお与えくださり、その助け主がいつまでも、あなたがたとともにいるようにしてくださいます。この方は真理の御霊です。」
(ヨハネ 14:16,17a)

「わたしが父のもとから遣わす助け主、すなわち、父から出る真理の御霊が来るとき、その方がわたしについて証ししてくださいます。」(ヨハネ 15:26)

本日は聖霊降臨日(ペンテコステ)です。

私たちの救い主イエス・キリストは私たちの罪のために十字架で死んでくださり、墓に葬られてから三日目に死から復活されました。

それから 40 日目に弟子たちが見ている前で天に昇って行かれました。

そして召天から 10 日目に、復活からは 50 日目の「五旬節」(ペンテコステ)に、ご自身の弟子たちの上に聖霊を特別に豊かにお注ぎになりました。

本日は聖霊降臨節(ペンテコステ)である。

『ペンテコステ』という言葉の語源は、ギリシヤ語で『50番目』を意味する『ペンテ-コストス』である。

それで、ペンテコステは「五旬節」(「五旬」とは50のこと)と訳されている(使徒 2:1. 20:16. I コリント 16:8)。

「五旬節」とはユダヤ人の暦(こよみ)では『過越の祭り』から「七週間を数え」(申命記 16:9) た(7日×7週=49日) 50日目の「七週の祭り」(出エジプト 34:22. 申命記 16:10)のことだった。

それで「五旬節」はユダヤ人にとって大事な日だった。

その日はイエスがよみがえられてから50日の日でもあった。